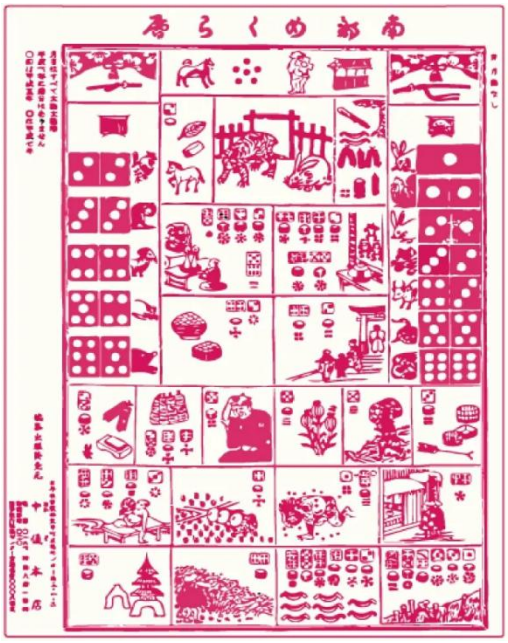
絵でお経を読む　（ちょっと箸休めにでも・・・）

大塚　忠彦

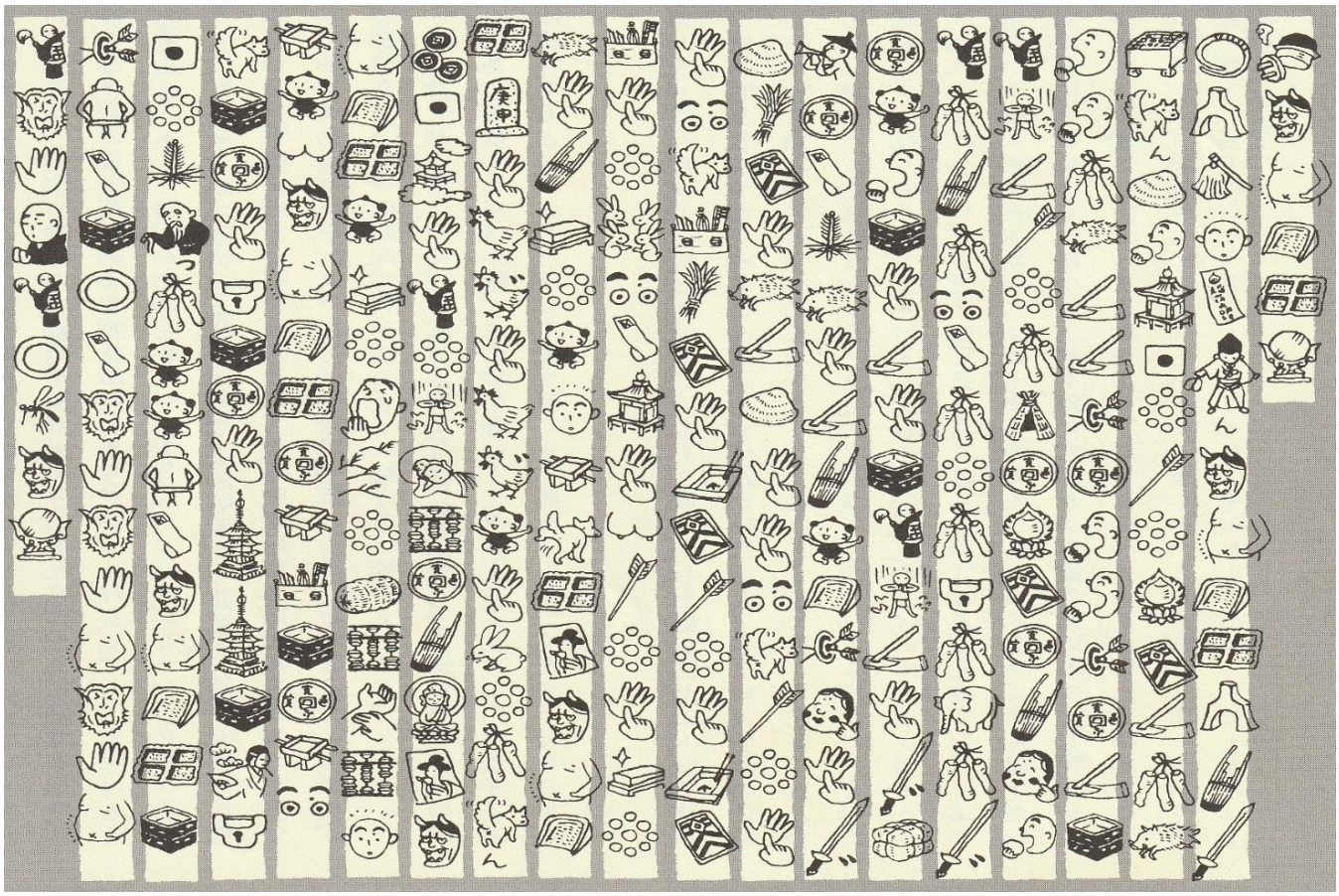


昔の日本には「絵暦」という暦があって、節季や年中行事や農作業の日程を文字ではなく絵で読めるように描かれた暦であった。特に東北地方で流布していた『南部絵暦』（南部めくら暦）が有名で、往時の百姓は殆どの人が字が読めなかったので、この絵暦を頼りに農作業を進めていたそうな。

右図のように、月をサイコロで表し、節分、彼岸、八十八夜、入梅、土用、二百十日などを絵柄で表現していて、例えば盗賊が荷を奪う姿で「入梅」（荷奪い）、禿頭に手を当てた姿で「半夏生」（禿げ生ず）と読ませたりするユーモアに満ちた絵柄の暦であった。因みに、私の実家も百姓であったので小学生の頃迄は斯様な農作業暦が玄関の壁に貼ってあったのを記憶している。

さて、暦と同様に経本も往時の信心深い庶民にとっては貴重なものであったが、漢字で書かれている経文は当時の文字が読めない大衆にとってはチンプンカンプンであったので、経文を絵文字に置き換えた経本が流行ったそうな。特に誰もが唱えた短いお経「般若心経」の経本には『絵心経』という絵文字の経本が三百年程前の元禄時代に考案されて流行したという。お経は書かれている意味が分からなくても音読さえできればそれで十分に功徳が積めるものであるので、これは大変結構なことであった。

当会の会員も高齢者が多いので、これから身内や友人の野辺送りの機会も増えるであろうから、例えば般若心経を唱える機会も増えるであろう故、一度「絵心経」なる経本で唱えてみては如何であろうか。下に出したのは元禄時代に南部地方（盛岡）で作られた絵心経の絵文字をやや現代風に書き直された絵心経である。



絵文字の読み方は、例えば、上の絵心経では最右列の６絵文字は、下段掲載の経文の「頭」の部分の“仏説”を省いた「摩訶般若波羅蜜心経」に当たる絵文字で、釜を逆さまに描いて「マカ=摩訶」、般若の面で「ハンニャ=般若」、出ッ腹で「ハラ=波羅」、箕で「ミ=蜜」、田んぼで「タ=多」、神鏡の絵で「シンギョウ=心経」と読ませている。また、経文で何回も繰り返し出て来る「色」（シキ、“形あるもの”の意）は鋤（スキ）の絵で表されているが、これは東北弁で「シキ」は「スキ」と発音されるから身近な鋤の絵を当てたのであろう。

その他、種々の絵文字が身近な物に当て嵌められて描かれているが、坊さんや爺さんや花魁や美人画やお多福やオッパイなども描かれていて見ているだけで想像が逞しくなってきて楽しいし、なかなかにユーモラスでもある。表現のバリエーションも豊かで、例えば、剣（ケン）の絵に濁点を付加して「ゲン」と読ませたりしている。

どのように音読するのか想像がつかないような絵文字もあるが、下に示した般若心経本文と照らし合わせて音読を試みるのもアタマの体操になってよろしいのではあるまいか。

因みに、般若心経の全文は 262 文字、上の絵心経の絵文字も 265 個であり、文字も絵文字もほぼ同数であるから、絵文字を順番に経文の漢字発音に当て嵌めて読んでいくのも比較的簡単であろう。

（上述したが、下の経文の頭部の冒頭の“仏説”は上記の絵心経には入っていないことにご注意）。

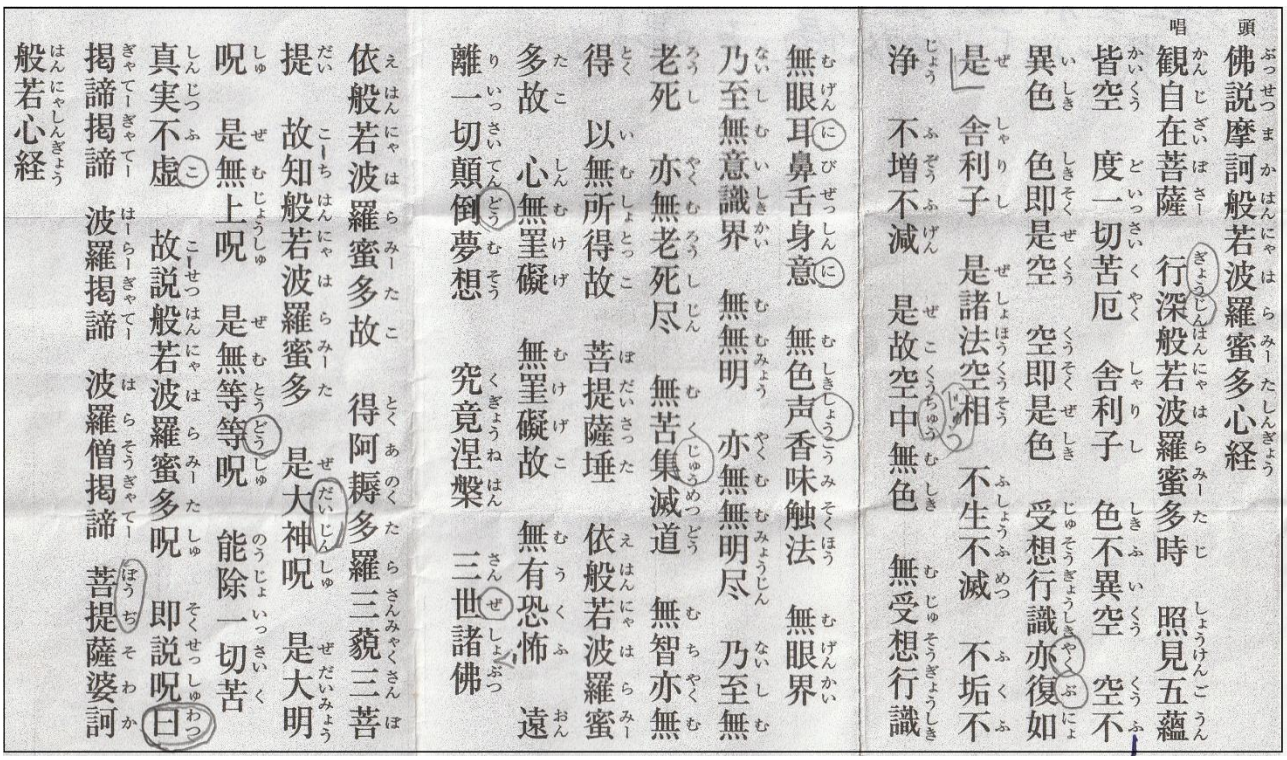
この絵心経がスラスラと音読できるようになれば、彼岸で天女様に抱かれて極楽往生できること間違いなし。

そこで閻魔大王試験官による冥途試験の予想問題集。絵心経に描かれた以下の絵文字の音読や如何に？

（イ）右から５列目、上から２番目のフンドシの人

（ロ）同じく右から５列目、下から２番目のお多福（指にヒント）

（ハ）左より９列目、下から６番目のオシッコしている犬



［補記］　一般的に、般若心経は日蓮宗や浄土真宗などの宗派では唱えない慣習になっていますので、ご注意。

前頁に掲げた絵心経は、玄侑宗久著『般若心経』（ちくま新書）掲載の図版を引用しました。

以上　（令和７年５月記）